



Welcome to Egypt

竹内郁雄 (早稲田大学)

私の経験では、エジプトに蚊はあまりいないが、蠅が多い。人が集まる場所には蠅がいる。というのも、講義にいられた先生に同行して休日に初めてピラミッド見学をしたとき、有名なギザから次第に南下してサッカラ、ダハシュールと、人の数が減る順番に訪れたのだが、蠅の数が激減していった。

まだ学生寮に間借りしている形のE-JUSTキャンパスには、学生寮の建物の1フロアを借りた小さな学食がある。エジプト料理の塩のきつさが苦手な私はそこで作ってくれるサンドイッチ(長いコッペパンのハンバーガーのセット、1皿130円ぐらいだから、エジプト的にはわりと高い)で済ませている。それもいやな日本人は愛妻弁当もしくはお手製弁当を持参する。これが意外に多い。その学食に行くと、いつも暗い。カーテンを引いて、灯を消してあるからだ。人がいないのかと思うとちゃんと人がいる。蠅が寄ってこないようにするためなのだ。これを見ると、ますます美味しくなさそうに見える。しかし、ここが学生たちの重要なコミュニケーションスペースであることは確かだ。

この学食で、わりと公式な歓送迎会なども行われる。E-JUSTのKhairy(ハイリー)学長は元政府高官でとても恰幅のいい方である。学長をガーナ大使が訪問されたとき、なぜか私も同席することになり、普段学生が食べているようなビニールシートのテーブルに10名あまりが着席した。こういう場合でもTPOをわきまえない蠅は飛び回る。だが、皆ごく自然に手を振って蠅を追い払いながらの懇談と会食であった。

私が普段座っているJICAのオフィスでもよく蠅が飛び回る。エジプトに行くようになってから運動不足の私としてはこの蠅を退治するのが1つの運動となった。手で蠅を叩くのである。飛んでいる蠅

を手で叩けると達成感があって嬉しい。しかし、その野蛮な行為を見兼ねた人がちゃんと蠅叩きがあると教えてくれた。なるほど文明の利器だ。ところが、その文明の利器が思わぬ禍を招いた。

ある日、私のノートPCの画面の左上隅の角に蠅が止まった。それ、とばかりに必殺の一撃。ところが、蠅は飛び去り、蠅叩きが勢い余ってキーボードを直撃してしまった。おかげで、Caps Lockのキートップが飛んでしまった。このキーは当然のことながら、Controlのキーに変更してあり、それが非常に重要な私にとっては致命傷である。いろいろ修復を試みたがダメ。ノートなのに、キートップの裏がパンタグラフのような凝った仕掛けになっていたのにはちょっと感動した。この話を学生にしたら、アレクサンドリアの秋葉原に行けばなんでも揃うと言う。幸い私のノートPCは国際標準タイプだったので、これなら確実だと。もう1つの幸いは、長丁場の出張なので予備のノートPCを持参していたことである。OSのバージョンが違うのだが、講義をするのに問題はない。

さて、次の週、学生が戻ってきたのだが、「秋葉原」にはなかったとのこと。残念。でも、キートップ1個から売っている市場があるというのがすごい。結局、エジプトから通販に申し込み、留守宅にキーボード全体の代替品を送ってもらうことで、帰国後に修復ができた。

そんなこともあり、また手で蠅を叩くことになった。行き帰りのバス内も含めると1日で最高5匹退治したこともある。宮本武蔵ではないが、蠅が止まると、蠅の目を見つめ、蠅の飛び去る方向を見定め、フィードフォワードの原理で、飛び立つべきところを叩くのである。エジプトに行って、この歳で新しい技を獲得できるとは思わなかった。ちなみに

エジプトの蠅は乾燥しているようで、叩いても手は見た目にはまったく汚れない。実はゴキブリと同様、叩く直前に風圧で気絶して手をすり抜けているのかもしれない。

往復のバスの中では、よく皆とお喋りするのだが、なにかのときに「うるさい」はどう漢字で書くかというクイズを出した。知らない人が意外に多かったのが驚いた。もちろん正解は「五月蠅い」である。それを披露したら、逆にとてもいい反応をもらった。「なるほど、エジプトの蠅は5月が一番活発で五月蠅い。それ以降になると、暑くて蠅がフラフラになって飛ぶから、五月蠅くなくなる」のだ。実際、日本でも5月の蠅が一番五月蠅いとされていたようだ。

OSで思い出した事件が1つ。近所のいわゆる高級スーパーに2~3日に一度は買物に行くのだが、ある日、かなりレジが滞っていた。レジの向こう側からエジプト人の中年男性が多分英語で大声で「いつものことだよ」みたいなことを私に話しかけてくる。チラリとレジの液晶の画面を見ると、昔のアナログTVの垂直同期ずれのように画面が縦にバラバラ走っている。これじゃ、レジができないはずだ。キャッシャーがなにやらバチャバチャとキーなどを叩いているが、要するに叩いて直す古式に従っているとしか見えない。しかし、叩いてはみるもので、ときどきふと静止して、バーコードが読めたりする。ただし、複数のレジマシンが同時に、ではない。

なんとも不思議な現象なので、待たされていることを忘れてしばらく眺めていた。すると、1台のレジマシンがどうもマスターのようで、訳知り風の人がそのマシンの叩くだけ打つだけか始めた。おお、するとその液晶にはWindows XP Serverのロゴが…。さらに叩くだけ、なにか打つだけかしているうちに、よろよろとしつつも、すべてのレジマシンの液晶のバラバラは無事静止し、レジ作業が、やり直すことなくちゃんと続行できたのである。いまでもって、これがアナログ不良だったのか、ソフト不良だったのか判断できない。しかし、Windowsが意外とロバストであることに感心させられた。これもエジプトでないと体験できないことかもしれない。

エジプトではテクノロジーもインチャラー(神の

思し召しのままに)の対象のようだ。エジプトの人たちはこのインチャラーを気軽に使う。翌週のゼミの時間を決めて学生に伝えたら、返答は「インチャラー」だ。額面通り受け取れば、実際はどうか分からないということだが、「了解」というぐらいの意味らしい。何ごとにも絶対はないという意味では合理的だ。逆に、なにか不具合が起こっても、神の思し召しだから深く悩まない。確かに必要以上に神の思し召しで延期や遅延が多かったと思う。

私用の携帯電話を買いに行ったとき、V社の店に入って、一番安いS社の機械を見つけて買った。早速、V社のSIMカードを入れて接続確認。するとどうもうまくいかない。それはないだろう、と思ったが、担当の男性店員がとうとう諦めて「Welcome to Egypt」と言った。最初、「??」と思ったが、これがなにか不具合が起こったときの、外国人に対する一般的な挨拶らしいことに気がついた。これには「Thank you」としか応えようがない。しかし、ちゃんとすぐ近くにある商売仇のE社というキャリアの店を紹介してくれた。それ以来、「Welcome to Egypt」は、インストールしたタクシーなど、いろいろなところで聞くようになった。

こう書いてくると、エジプトで大変な生活をしていて気の毒だと思われる方が多いと思うが、話は逆で実に刺激の多い生活というのが実感である。抽象的な物云いしかできないのが歯がゆいが、この国には、いろいろなものが渦を巻いてぶつかりあっているようなエネルギーを感じる。それはいまは単なる内部摩擦にしかかかっていないかもしれないが、それらのベクトルが揃ったとき、とてつもないエネルギーとなって、この国を大きく進展させると思わせるものがある。まだ年寄りたちがこの国を仕切っているし、貧富の差も激しいが、この国の巨大な若者集団はいつかきつとエジプトを大化けさせるに違いない。

(2012年9月21日受付)

竹内郁雄 (正会員) nue@nue.org

1971年東京大学大学院修了、以降、NTT研究所、電気通信大学、東京大学を経て現職。東京大学名誉教授。エジプト日本科学技術大学の立ち上げに参加中。未踏IT人材・発掘育成事業統括プロジェクトマネージャ。